

～命綱としてのアディクションとハームリダクション～

依存症者は、これらの心理的特徴ゆえに生きづらさを抱えており、この社会を生きていくことは大変な困難を伴います。彼らにとってアルコールや薬は社会を生き延びる上で必要な、まさに命綱であり、手放すことは難しいのです。¹⁾このような事実を踏まえ、依存症治療は**アルコールや薬をやめさせよう**としない、**ハームリダクション**に変わりつつあります。

命綱であるアルコールや薬を取り上げようとするれば、患者はより抵抗し、本音を言えなくなります。なんとか断酒・断薬に応じたとしても、やめるのは簡単ではないですから、再使用して自信を失い、自尊心はさらに傷つきます。結果として、家族の信頼を失い、治療・支援者からも遠ざかっていくことになります。こういった家族や援助者とのつながりの喪失こそが最大のハームであると松本は指摘します。²⁾他方、ハームリダクションの考えにたつと、アルコール・薬物をやめさせようとするのではなく、**「その人の生きにくさ、生活そのものを支援」**していけば、患者自らアルコール・薬物を手放すというのです。「それは理想論ではないか」と疑問に思う方もいるかもしれませんが、このことを示す有名なラットパークの実験というのがあります。³⁾狭い檻に水が入った2本のボトルを備え付け、1本のボトルには水を、もう1本にはモルヒネを溶かしました。その檻の中にラットをまずは1匹入れます。ラットが1匹だけだと、すぐにモルヒネ入りの水を飲むようになり、たち

まち依存症になってしまいました。今度は、同じように2種類のボトルを用意して大きな檻に取り付けます。さらに、ほかにたくさんの遊戯と食料を用意し、20匹の仲間のラットを入れました。ここにさきほどの依存症になったラットを入れますと、仲間との活動や遊びに熱中し、モルヒネに見向きもしなくなったのです。人間においても、ベトナム戦争が同様の事実を示しています。³⁾この戦争では、戦場の恐怖から逃れるために、何万人ものアメリカ軍兵士がヘロインを日常的に使用し、20%の兵士がヘロイン依存でした。ヘロインは依存性の大変強い物質ですから、戦争終結後、アメリカ国内はヘロイン患者で溢れかえると思われていました。しかし、実際には、ヘロイン依存の兵士たちの95%はほとんど治療を受けることなく、終結後1年以内にヘロインを止めました。兵士たちは、平和な故郷に戻り、家族に囲まれた生活を取り戻すと、ヘロインのことを忘れたかのように元の生活に戻ったのです。

《参考文献》

1. 成瀬暢也 著, ハームリダクションアプローチ やめさせようとしなない依存症治療の実際.
2. 松本卓也, 松本俊彦編. アディクションスタディーズ. 薬物依存症を捉え直 13章
3. ヨハン・ハリ著. 福井昌子 訳. 麻薬と人間 100年の物語 薬物への認識を変える衝撃の真実

